

# プレイヤード派周辺における歴史家のあり方

——ピエール・パスカル（1522-1565）をめぐる、歴史・文学・政治

志々見 剛

ピエール・ド・パスカル——あるいは「ド」を僭称と取る説に従えば、ピエール・パスカル——は、ジャック・サドレの流れを汲むキケロ風のラテン語散文によって名高い、トゥールーズゆかりの人文主義者である。プレイヤード派の詩人たちと親しく交わり、アンリ二世治下に国王修史官に任じられたことで知られている。とはいえ、生前の名声に比して、残された作品は僅かしかかない。出版に至ったものは、若き日のヴェネツィア十人会での弾劾演説——これに加えて「擬人化されたフランスの、ヴェネツィア共和国への訴え」、ローマでの法学学位演説とイタリア滞在中の書簡を所収——<sup>1</sup>、そしてアンリ二世の死の直後に書かれた『アンリ二世頌<sup>2</sup>』を数えるのみである。他には、断片的に伝わる詩や書簡の類を除けば、ポール・ボヌフォンが『国王修史官ピエール・ド・パスカル（1522-1565）』の付録として一部を復刻したフランス史の断片<sup>3</sup>、そしてミッシェル・フランソワが『1562年にフランスで起こった出来事に関する日記<sup>4</sup>』として校訂・出版した草稿が伝わっている。

彼に関する研究としては、上に挙げたポール・ボヌフォンの伝記的・書誌的研究に加えて、ピエール・ド・ノラック『ロンサールとユマニスム』の「ブリガッドの中のキケロ主義者」の章が重要である。これは、パスカルをイタ

---

<sup>1</sup> *Petri Paschali Adversus Joannis Maulii parricidas actio, in senatu veneto recitata. Ejusdem Gallia per prosopopaeiam inducta ad venetam remp. Oratio de legibus. Epistolae in italica peregrinatione exaratae*, Lyon, S. Gryphium, 1548, in 8°. 時を措かず、仏訳が刊行された。*L'Oraison de M. Pierre Paschal, prononcée au Sénat de Venise, contre les meurtriers de l'archidiacre de Mauléon, traduite du latin en françois par le protonotaire Durban*, Paris, Vascosan, 1549, in 8°. 事件の詳細は後述。

<sup>2</sup> *Henrici II, Galliarum regis, elogium*, Paris, Vascosan, 1560, in folio, suivi de la traduction de l'éloge en français par Lancelot de Carles, en italien par Antonio Caracciolo, et en espagnol par Garcí Sylves. 同年同書肆より in 8°の普及版も出されている。

<sup>3</sup> BNF Dupuy, 624, fond latin 11481 et 18339. Paul Bonnefon, *Pierre de Paschal historiographe du roi (1522-1565)*, Paris, L. Techener; Bordeaux, Paul Chollet, 1883, pp. 61-71 で、1545年のポルドー蜂起に関する一節を読むことができる。

<sup>4</sup> *Journal de ce qui s'est passé en France durant l'année 1562, principalement dans Paris et à la Cour, publié d'après le manuscrit autographe par Michel François avec une introduction de Pierre Champion*, Paris, Henri Didier, 1950.

リアかぶれで成り上がりの野心家と決めつけている点に難があるが、彼とプレイヤー派の詩人たちの交流を丁寧に描き、未公刊の書簡を含む貴重な資料を採録している<sup>5</sup>。近年のものとしては、オレスト・ラヌムの研究所の中の概括的な記述を除けば<sup>6</sup>、ジョルジュ・スベユのいくつかの記事が、パスカルに関するほぼ唯一の研究である<sup>7</sup>。もっともこれは、大筋においては実証的かつ緻密なものであるものの、ノラックのような意見に対して同郷の偉人を擁護せんとする意図が見え隠れするので、注意を要する。

まずは、これらの研究に従って、伝記的な事実を辿ってみよう。1522年、トゥールーズ近郊のソヴテール=ド=コマンジュ Sauveterre-de-Comminges に生まれたピエール・パスカルは、幼少より才児の誉れ高く、ジャック・サドラの設立したカルパントラ学寮に入るや、碩学ジャック・ボルダンの指導の下、忽ち頭角を現した。トゥールーズに移った後は、法学を修める傍ら、詩文に才を発揮し、「花の祭り Jeux floraux」で三度の花冠を贏ち得て「祭りの主 maître ès jeux」となった<sup>8</sup>。同地のアルマニャック枢機卿に見出され、そのイタリア旅行に従う。その間、ローマで法学学位を授かる一方、郷友ジャン・ド・モレオンがパドヴァで惨殺された事件に関し、ヴェネツィア十人会で犯人の処罰を求める演説を行って名を上げた<sup>9</sup>。これは直ちに公刊され、またマ

---

<sup>5</sup> Pierre de Nolhac, *Ronsard et l'humanisme*, Paris, Honoré Champion, 1921; Genève, Slatkine, 2009, quatrième partie « Le Cicéronien de la Brigade: Ronsard et Pierre de Paschal », pp. 271-339.

<sup>6</sup> Orest Ranum, *Artisans of Glory: Writers and Historical Thought in Seventeenth-Century France*, Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1980, pp. 70-75.

<sup>7</sup> Georges Soubeille, « Plaidoyer pour un cicéronien: Pierre de Paschal, historiographe royal (1522-1565) », *Revue française d'Histoire du livre*, nouvelle série n° 38, janvier-février-mars 1983, pp. 3-32; « Le Secret de Pierre Paschal », *Revue de Comminges*, t. CVII, 1992, 2<sup>e</sup> trimestre, pp. 191-223; 3<sup>e</sup> trimestre, pp. 363-372.

<sup>8</sup> François de Gélis, « Quelques poètes des Jeux floraux aux XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècles (deuxième partie) », *Mémoires de l'Académie des Sciences, Inscriptions et Belles-Lettres de Toulouse*, 2<sup>ème</sup> série, t. I, 1923, pp. 69-74 に、「王の歌 Chants royaux」と呼ばれる伝統的な形式で書かれた、若き日のパスカルの詩の抜粋を見ることができる。当時の「花の祭り」については、François de Gélis, *Histoire critique des jeux floraux: depuis leur origine jusqu'à leur transformation en académie: 1323-1694*, Paris, Picard; Toulouse, É. Privat, 1912; Genève, Slatkine, 1981 および John Charles Dawson, *Toulouse in the Renaissance: the floral games, University and student life: Etienne Dolet (1532-34)*, New York, Columbia University Press, 1923 参照。

<sup>9</sup> 殺害されたジャン・ド・モレオンは、パスカルの竹馬の友であると同時に、彼の庇護者の一人であったフランソワ・ド・モレオンの子息でもあった。法学を修めるべくパドヴァに赴いた直後、おそらくは教授選挙をめぐる学生間の党派抗争に巻き込まれて殺害されたようである。下手人がヴェネツィアの有力層の子弟であったため、パスカルの演説は奏功せず、かえって彼の身に危険が及びかねない事態に陥った。

ルグリット・ド・ナヴァールの肝煎りで仏訳も出版された<sup>10</sup>。1549年にフランスに戻ると、パリでロンサルらプレイヤード派の詩人たちの知遇を得、親しく交わった。その一方でカトリーヌ・ド・メディチの庇護を受け、1554年に「国王修史官 *historiographe du roi/ historiographe royal*<sup>11</sup>」に任ぜられ、また1559年、アンリ二世の急死に及んで<sup>12</sup>、ラテン語の『アンリ二世頌』を著した。これに前後する一時期、ロンサルらと仲違いし、ロンサールのラテン語諷刺文「ピエール・パスカル讚<sup>13</sup>」、チュルネーブのラテン語諷刺詩「文学研究から利益を得るための新しい方法についての書簡 *De nova captandae utilitatis e literis ratione epistola*<sup>14</sup>」（1559）——同年、デュ・ベレーによる仏訳も出される<sup>15</sup>——という、激しい攻撃に晒される事態に陥った<sup>16</sup>。もっとも、

<sup>10</sup> Georges Soubeille, « Le Secret de Pierre Paschal », art. cité, p. 200.

<sup>11</sup> もっともこれは、不定期で職掌も曖昧なものであった。François Fossier, « À propos du titre d'historiographe sous l'Ancien Régime », *Revue de l'histoire moderne et contemporaine*, XXXII, juil.-sept., 1985, pp. 361-417 参照。16世紀を通じてこの職に任じられたのは、ドゥニ・ソーヴァージュ（1550年任命）、ピエール・パスカル（1554年）、フランソワ・ド・ベルフォレ（1568年）、ベルナル・デュ・アイヤン（1571年）、クロード・フォーシェ（1581年）、ニコラ・ヴィニエ（1585年）といった錚々たる面々である。このほか、任命の直後、聖バーテルミーの虐殺のため亡命を余儀なくされたフランソワ・オートマンもいる。

<sup>12</sup> カトー・カンブレジ条約に関連して取り決められた、王妹マルグリットとサヴォワ公エマヌエーレ・フィリベルト、王女エリザベートとスペイン王フェリペ2世という二つの結婚を控えた祝宴で、王はモンゴメリ伯との馬上槍試合において偶発的に右目に傷を負い、アンプロワーズ・パレらの治療も空しく、10日後に命を落とした。

<sup>13</sup> « Éloge de Pierre Paschal », *Œuvres complètes*, éd. Jean Céard, Daniel Mélanger et Michel Simonin, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. II, pp. 1212-1222. 以下ロンサールの詩文の引用は、他に注記のない場合、この版による（*Œ. C.*と略す）。この作品はミュンヘン図書館にてノラックが発見し、前記の研究書中で出版したものである（Nolhac, *op. cit.*, pp. 257-270 参照）。正式な題名は伝わっていない。なお、現在は散逸しているが、パーキエの仏訳があったとされる（« A Monsieur Renard », *Lettres*, I, 16, *Les Œuvres complètes d'Estienne Pasquier*, Amsterdam, 1723 ; Genève, Slatkine Reprints, 1971, t. II, col. 23-24）。ロンサルはさらに、『オード集』の再版に当たって、パスカルの名を完全に抹消すべく、彼に寄せた詩をすべて別人宛に書き換えている。

<sup>14</sup> なお、パスカルのトゥールーズ遊学の時期はチュルネーブが同地で教鞭をとっていた時期に重なるため、両者の間には当時から何らかの交渉があった可能性が高い。

<sup>15</sup> « La nouvelle manière de faire son profit des Lettres », *La Monomachie de David et Goliath*, XIII, éd. Ernesta Caldarini, TLF 298, Genève, Droz, 1981, pp. 144-149. これは当初、1559年にカンティル・デュ・トゥルセイ（*Quintil du Troussay*）名義で「Le poète courtesan」とともに発表されたものだが、1560年版の同集に収められた。

<sup>16</sup> 原因には諸説ある。通説は、ピエール・パスカルが当代の文芸の士を対象として、ポール・ジョヴの『文芸名士賛』風のラテン語の名士伝を書くことと約束しながら反故にしたことに業を煮やした、というものである。パーキエも、このようなパスカルの「瞞着」に言及している。ノラックはこれに加えて、メラン・ド・サン・ジュレの死に際してパスカルがこの詩人を「当代随一」と称えたのがロンサールの勘気に

パスカル自身がそれに応酬することはなかった。しばらくして、これも経緯は不確かながら、ロンサールと和解した模様である<sup>17</sup>。1563年頃、パスカルはトゥールーズへと戻り、1565年、その地で歿した。

ロンサールやチュルネーブによる激烈な糾弾は、パスカルの人生の中の一挿話でしかなかったにもかかわらず、後世に至るまでの彼の評価を決定づけてしまった。例えば『ビブリオテーク・フランセーズ』を見ると、ラ・クロワ・デュ・メヌスが「ピエール・ド・パスカル」の項で不正確ながらも好意的な記述を残しているのに対し<sup>18</sup>、デュ・ヴェルディエは、「ピエール・パスカル」の項で極めて辛辣な意見を吐いている。すなわち彼は、書いてもいない本を書いたと吹聴する輩を「ビブリオテーク」に収めるのは甚だ心外だと縷々述べた後、パスカルに矛先を転じて次のように言う。

「だが——と人は私に言うだろう——あなたは、何ゆえにこのようなことを言うのか？ ピエール・パスカルについて語らねばならないといっても、彼がフランス語で書いたものなど誰も見たこともないわけで、また、彼が何も書いていないとしたら、なぜあなたは彼をここに収めようというのか？」これに対して私は答えるだろう。彼は著作家の列に入らず、世間を欺く単なる詐欺師であって、焼肉の代わりに匂いだけを人々に食べさせ、それによって国庫から、フランス史を書くためと称して年1200リーブルもの俸給を掠め取っていたのだ。そして、この史書について期待を持たせるために、彼は「ぴえーる・ばすかるニヨルふらんす人ノ歴史全四巻」という文句を書いた小さな紙切れをばら撒いていた。しかし、死んだとき、それを僅か六葉ほどしか完成させていなかったのだ。これについて王立教授アドリアン・チュルネーブは——彼の三倍以上の俸給に値しながら、実際はその三分の一の俸給しか貰っていなかったのだが——、フランスがかように欺かれているのに憤って、彼に対する諷刺詩を著した。私は、パリのハルブ通りのパスカルの陋居で、彼の残したものすべてを見たが、それはせいぜい十か十二葉を超えない程度のもので、彼が死んだときに、いくらかのぼろきれと一緒に、50 エキュにのぼる負債の残金の抵当として

---

触れたと説明する (Nolhac, *op. cit.*, pp. 329-330)。これに対し、スベイクは、アンリ二世の崩御に際し、本来ならば王の詩人たる自分に追悼詩が任されるべきであるのに、パスカルに『アンリ二世頌』が託されたという事実にとどく自尊心を傷つけられた、と推測する (Soubeille, *art. cité*, p. 212, p. 214)。

<sup>17</sup> 1562年の『日記』には、ロンサールと同席したという記録がある(4月22日の項。Journal, éd. citée, p. 28)。また、死に及んで、パスカルはロンサール、ドラ、チュルネーブらに形見をとして金の指輪を遺贈している。

<sup>18</sup> 「ピエール・ド・パスカル ラングドック南部の貴族。博識で、ラテン語およびフランス語の偉大な歴史家である。彼はラテン語およびフランス語にてフランス諸王の歴史を書いたが、それはまだ印刷されていない」云々 (La Croix du Maine, *Les Bibliothèques françaises*, t. II, p. 303 ; Graz, Akademische Druck-u, 1969, *ad loc.*)。

家主のモージ氏に残したものであった。しかし、彼の撒き散らした名声ゆえ、彼に相応しい美しく博学なフランス史が世に出ることを絶えず待ち望んでいたロンサルやその他の人々が彼に送った賛辞は、名高いものとなった。彼がトゥールーズで歿してから、彼のために、サンテチエヌ教会の回廊に見られる立派な墓碑が建てられたのである<sup>19</sup>。

以下、デュ・ヴェルディエは、デュ・ベレー訳のチュルネーブの諷刺詩を引用し、形ばかりパスカルの著作目録を挙げて、記事を終える。是非はともあれ、ロンサルとチュルネーブに端を発したこのような人格攻撃が、パーキエ（彼はチュルネーブの甥でもあった）<sup>20</sup>やブラントーム<sup>21</sup>を経て、現在に至るまでのピエール・パスカルの評価の基となっているわけである<sup>22</sup>。

とはいえ、我々の関心事は彼の汚名を雪ぐことでも、伝記的事実を再検討することでもない。パスカルは、経歴からいっても資質からいっても、歴史を文学と政治の交点に位置づけた当時の一般的傾向、より正確にはキケロ主義的な傾向を体現した人物であった。それゆえ、一方では彼自身の残したいくつかの歴史的作品から、他方では彼に向けられたロンサルやマニイ、チュルネーブらの毀誉褒貶から、16世紀中葉、プレイヤード派の周辺において、歴史および歴史家のあり方がどのように理解され、どのような変容を遂げたかを検討しようというのである。

## 1. 歴史家ピエール・パスカル

### (1) フランスの歴史が望まれた背景

人文主義者の目指す歴史とは、約めて言えば、キケロが『弁論家について』で示した規則に従い、ティトゥス・リヴィウスなど古代の歴史家に範を取ったものであった。内容的には、人間の営為、特に政治と軍事に重きを置き、神慮や奇蹟に導かれた中世の歴史記述と一線を劃する。文体と形式については、歴史を「弁論家の責務 *munus oratoris*」に属する文芸作品と見做す考えか

<sup>19</sup> *Les Bibliothèques françaises*, éd. citée, t. V, pp. 310-311.

<sup>20</sup> パーキエはパスカルを、「大いなる怪物」、「危険な獣」などと呼んでいる (« A Monsieur Ronsard », citée ci-dessus ; voir aussi « Lettres à La Croix du Maine », *Lettres*, IX, 9, éd. citée, t. II, col. 237-239) 。

<sup>21</sup> *Vie des grands capitaines*, in *Œuvres complètes de Pierre de Bourdeille, seigneur de Brantôme*, éd. Ludovic Lalanne, New York, Johnson Reprint, 1968, t. III, pp. 283-285.

<sup>22</sup> 例えば、*Dictionnaire des Lettres françaises, XVI<sup>e</sup> siècle*, dir. Michel Simonin, Paris, Fayard, « La Pochothèque », 2001 の « Paschal (Pierre de) » (Henri Chamard) の項。

ら、何よりも「雄弁」を求め、古代の著作に伍する典雅さ・荘重さを目標とした。目的においては、偉人たちの徳を顕揚してその栄光を不朽のものとするにに加え、それらの「範例 *exemplum*」を通じて読者の道徳的教化を図るものであった。

このような新たな歴史記述は、まずイタリアの人文主義者たちの間で実を結ぶ。15世紀頃から、ラテン語、次いで俗語で、都市、地方、王、国家など様々なレベルの歴史が編まれるようになった<sup>23</sup>。イタリア侵攻によってフランスが同国の先進的な文化に直接触れた16世紀になると、フランスにおいても、古代ローマ及びその後継を自認するイタリアに対抗して、フランスについての、フランス人による、フランス語での歴史が求められるようになった。

これら三つの点は、実際上は互いに重なり合うものではあるが、それぞれ区別して扱うことができる。

まずは第一の点について。近現代のイタリアが、古代ローマと同等に「歴史」——年代記や覚書の類ではなく——の題材たりうると初めて公然と主張したのはレオナルド・ブルーニであったが、フランスの過去についても同様の主張が強くなされるようになった。これは確かにジャン・ジェルソンなどが夙に14世紀末に訴えていたことではあったが<sup>24</sup>、16世紀に入ると、例えばビュデに見られるように<sup>25</sup>、これはますます切実な問題となる。中世の蕪雑と目された年代記とは一線を劃した、人文主義に相応しいラテン語の文体が基準となる。これによって、全ヨーロッパに、フランスの歴史的・文化的な栄光を喧伝できるからである。かくして現れたのがポール・エミール（パオロ・エミリオ）の『フランス史 *De Rebus gestis Francorum*』（1548）である。彼はヴェローナ出身の人文主義者兼医師であったが、シャルル八世がイタリア遠征の折に召抱えると、ルイ十二世にも重用され、王国の修史官としてフランスの通史を完成させた。これは、見方を変えれば、アントニオ・ボンフィニの『ハンガリー史 *Rerum Ungaricanum decades*』（1491）やポリドール・ウェルギリウスの『英国史 *Anglica Historia*』（1534）と同様、イタリア人文主義の輸出の一環というべきものだった。

<sup>23</sup> Eric Cochrane, *Historians and historiography in the Italian Renaissance*, Chicago, University of Chicago Press, 1981; Edmund Boleslaw Fryde, *Humanism and Renaissance historiography*, London, Hambledon Press, 1983 参照。

<sup>24</sup> Gilbert Ouy, « La plus ancienne œuvre retrouvée de Jean Gerson : le brouillon inachevé d'un traité contre Juan de Monzon (1389-1390) », *Romania*, 83, 1962, p. 472.

<sup>25</sup> *De philologia*, Paris, I. Badius, f. 24 r<sup>o</sup>; f. 65 v<sup>o</sup>; *De l'institution des princes*, 24v<sup>o</sup>, in Claude Bontems, Léon-Pierre Raybaud et Jean-Pierre Brancourt, *Le Prince en France des XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècles*, Paris, PUF, 1965, p. 90.

第二の点は、イタリアの文化的ヘゲモニーに異を唱えるだけでなく——とりわけ、フランスの文化と歴史を誹謗したペトルルカに対する反発は根強かった<sup>26</sup>——、阿諛追従に長じたお雇いイタリア人を排するための指針でもあった。とはいえ、その嚆矢となったロベール・ガガンの『フランス史提要 *Compendium de origine et gestis Francorum*』(1495 初刊)は、エラスムスの激賞を受け、続編も含めて幾度も版を重ねたものの、フランスの正史の座をポール・エミールに譲ることとなった<sup>27</sup>。この後を受けてフランスの正史を完成させるべく、フランスの人文主義者たちの興望を担ったのが、ピエール・パスカルその人である<sup>28</sup>。「新たに來たる者よ、君がローマにてローマを探せど／ローマにてローマを見ることはなし」と嘆息したデュ・ベレーに先立って、彼はイタリア滞在中から、書物と遺跡とを通じて感得された古代ローマへの追慕を激しく表明すると同時に、現実のイタリアがその過去と決定的に断絶していることを強く意識していた<sup>29</sup>。それゆえに彼は、人文主義の土

<sup>26</sup> 「弁論家も詩人も、イタリアの外には見つからない」(*Sentiles*, IX, 1)、「すべての歴史というものは、ローマの賞賛以外の何であろうか？」(« *Invectiva contra eum qui maledixit Italie* », VII, 60) といったペトルルカの言葉は憤激の種だった。

<sup>27</sup> Franck Collard, *Un historien au travail à la fin du XVI<sup>e</sup> siècle : Robert Gaguin*, THR n° CCCI, Genève, Droz, 1996 参照。彼のイタリアに対する態度については、Mireille Schmidt-Chazan, « Histoire et sentiment national chez Robert Gaguin », Bernard Guenée (dir.), *Le métier d'historien au Moyen Âge : études sur l'historiographie médiévale*, Paris, Publications de la Sorbonne, 1977, pp. 233-300 参照。

<sup>28</sup> クロード・ド・セイセルの『ルイ十二世の類稀なる歴史 *Histoire singulière du Roy Loys XII*』の 1558 年版、おそらくは出版者ジル・コロゼの手になる序文に、次のようにある。「確かに、フィリップ・ド・コミーヌを読んで、皇帝は事実を学んだのであって、言葉を愉しんだのではなかった。というのも、コミーヌもその時代もいまだ、我々の時代が光を与えてくれたような、彫琢された言葉というものを持たなかったからだ。ニコル・ジレスの年代記も、ガギャンの編年史も、彼らよりも前にフランスの歴史を全体でも部分でも書こうと試みたその他の多くのものも、美しい歴史の性質として必須であるような、甘美さと荘重さに達することはなかった。それでも彼らは許されるべきであるし、むしろ称えられるべきである。というのも、彼らの時代の単純さと率直さに従って、彼らは、高遠かつ優雅に書くよりも、単純かつ率直に書いたからである。故フランソワ一世は、そのことを知って、戴冠にあたって光栄にも思い描いた自分の計画を追求した。すなわち、フランスに文芸を完全に甦らせ、再び繁栄させることである。王はヴェローナのポール・エミールに命じて、ラテン語で雄弁に (*latinement & disertement*) フランスの歴史を書くことを命じた。それによって、諸外国の国民が、彼の功績と荣誉とを、より喜びとともに、味わうことができるようにである。これと同じ目的のために、今上、偉大なるアンリ王は、父王の立派な足跡に従って、同じくラテン語で、優雅に、フランスの歴史の続きを書かせた」(Paris, Gilles Corrozet, 1558, non paginé)。ポール・エミールとフランソワ一世を結びつけるのは不正確。最後の文は、おそらくパスカルの事を指す。

<sup>29</sup> 彼はある手紙の中で言う。「要するに、野蛮さと田舎臭さがローマにすっかり入り込んでいて、へぼ詩人とへぼ弁論家しか生み出さない」(cité par Soubeille, art. cité,

俵においてフランス人が古代ローマに匹敵する作品を生み出し、またイタリア人と文学的栄光を競うことを、むしろ必然と見做したのである。無論この際に用いられるのは、古今を通じてヨーロッパの文芸の共通言語であったラテン語である。

第三の点、すなわちフランス語による歴史については、デュ・ベレーが『フランス語の擁護と顕揚』（1549）の中で切望している<sup>30</sup>。これは、国内の広い読者層に訴えることで、フランスの文化的・言語的水準の底上げと歴史を基底にした民族の一体感の創出を図るものであり、優れたラテン語による史書を望むこととは矛盾しない。ただ、これが実現するには、パスカルの何代か後の「国王修史官」に当たるベルナル・デュ・アイヤンを待たねばならない。彼は浩瀚な『フランス諸王の歴史 *Histoire générale des rois de France depuis Pharamond jusqu'à Charles IX*』（1576）を著したが、アンリ三世に宛てた1584年の序文の中で、「私は陛下の祖先の王族の歴史を書いた最初の者であり、そして、それを立派な秩序と立派な詞藻を与えた（おそらくは）唯一の者である<sup>31</sup>」と誇っているのである。

パスカルに託された国史の編纂は、フランスの人文主義者たちの悲願であると同時に、歴代の諸王、王母カトリーヌ・ド・メディチ、さらにはロレーヌ枢機卿のような高官に支持された一大国家事業でもあった。彼の文学的野心は、かくのごとく時代に棹差すものだったのである。以下、まずはパスカル自身の言葉をもとに、彼の歴史に関する理論と実践を辿ってみたい。

## (2) ギヨーム・ボイエ宛書簡：「キケロ主義者」パスカル

この年代不詳の書簡はトゥールーズ高等法院の長であったギヨーム・ボイエに宛てたものであり、ノラックが発見して前出の研究書に採録した<sup>32</sup>。こ

---

p. 197)。また、別の手紙の中でも、ローマの廢墟を訪ねて古人の栄光を追想して陶然となる一方、当時のローマ人については、「彼らの精神は、あるがままを見れば、今なお神的で不滅と思われているにもかかわらず、彼らの祖先と比べて頹廢を極め、その直系の子孫とは到底思われないほどである」と慨嘆している。（Roland Mortier, *La Poétique des ruines en France : ses origines, ses variations de la Renaissance à Victor Hugo*, Genève, Droz, 1974, pp. 84-85 に、この手紙の引用及び仏訳が見られる。）

<sup>30</sup> *La Défense, et illustration de la langue françoise*, liv. II, chap. V : « Du long Poème François », éd. Jean-Charles Monferran, Genève, Droz, 2001, pp. 139-140.

<sup>31</sup> Bernard de Girard du Haillan, *Histoire générale des rois de France*, Paris, Claude Sonnius, 1627, t. I, f. a. iii<sup>i</sup>. この歴史家については、Christophe Bernard, *Un historiographe politique de la Renaissance, Bernard de Girard, sieur du Haillan (c.1535-1610)* [thèse de doctorat non publié], dir. Michel Simonin, CESR Université de Tours, 2001 参照。

<sup>32</sup> BNF, Lat. 8585, f. 47-48 ; Nolhac, *op. cit.*, pp. 306-308.



の中でパスカルは、歴史を書く上での心得として、キケロ主義への忠実さを示している。すなわち、ボイエが「フランスの出来事に関する歴史」を「純粋に、かつ正しいラテン語で *pure et latine*」書くよう懇願したのに答えて<sup>33</sup>、彼は文体上の問題を挙げる。

私が認めるに、フランスには、少なくとも非常に下手というのではなく、おそらく他の人々よりも文学的であるように語る者たちが数多くいる。しかし、十全に、明瞭に、事柄とその価値に即して装飾されたように物を書く者は、それほど多くはない。ある者は、言葉のある種の空しい奔流を雄弁だと思っている。またある者は、何の選別もなしにあらゆる作家から粗雑で奇異な言葉を取ってきて、何とかして拵えたあれやこれやの弁論によって、自分が雄弁だと宣言している。あなたは何を求めるのか？ 豊かに語る、か的一切の古来の叡智、これこそが雄弁なのであり、ほとんど永遠の忘却の中に打ち捨てられている。そして、あたかも永遠で最善最大の神の何らかの恵みのごとくイタリアから生まれ出た、キケロ主義者の誰かがそれを人々の忘却と沈黙から解き放つことがなかったならば、それは完全に埋もれたままであったことだろう。[...]そして私は、自分がただ、他の作家たちの繊細さと優雅さを判別しうる域に達したと自負している。しかし私自身が、繊細かつ優雅に、そしてかの古代のローマ風に書くことができるかということについては、すっかり絶望している<sup>34</sup>。

この見せ掛けの謙遜にもかかわらず、パスカルは自分の文才に絶望するどころか、イタリア帰りの「キケロ主義者」として、人文主義の理想に相応しいフランスの歴史を生み出すことを自らの任としていた。この文章に続いて彼は、先人——おそらくは、ポール・エミールの続編を書いたアルヌール・フェロン——の仕事、を、不十分なものと批判している。

重要なのは、パスカルが、自明の前提として歴史記述を文学上の問題と捉え、「キケロ主義」的な模倣をその必要かつ十分な解決と見做していることである。そして、こうした考えは、以下にプレイヤー派の詩人たちについて見るように、当時広く浸透していたものであった。

### (3) 『アンリ二世頌』

これはパスカルが生前に完成した唯一の歴史的な作品である。ボヌフォンなどは、概してパスカルに好意的であるにもかかわらず、「歴史」というものを近代の規範に即して捉えているためか、あまり高く評価していない。ピエ

---

<sup>33</sup> Nolhac, *op. cit.*, p. 306.

<sup>34</sup> Nolhac, *op. cit.*, p. 307.

ール・チャンピオンはこのテキストの重要性を強調している<sup>35</sup>。実際のところ、これは歴史を個人の顕彰と結びつけるイソクラテス以来の伝統に属するものであり、人文主義者パスカルの面目躍如たるところである。

この作品は、人文主義者の文化的な責務と国家の政治的な要請との総合であった。すなわち、パスカルの文学的栄光を江湖に知らしめるものであると同時に、王の急逝に動揺する国内外に向けた、カトリヌ・ド・メディチのプロパガンダの一環であった。彼女と王との公然の不仲はひとまず措いて、先王を顕彰し、王統の継続性を明らかにすることで、幼少の新王を守り立てようというのである。当初出版されたイン・フォリオの豪華版は、王の肖像画と墓碑銘の写しを掲げ、ラテン語原文の他に仏・伊・西の三ヶ国語の翻訳が付されていた。この原稿は、特別の計らいでパリのシャトレに収蔵された。また、同年中に普及版がパリとリヨンで出版されている。

内容に目を転じてみよう。パスカルは、戴冠の日に始まって、イングランドとの抗争、ハプスブルク家とのイタリア・ドイツでの戦争や和議の顛末、そして槍試合での事故から、國中を悲歎の淵に追いやった王の悲劇的な死までを簡潔に述べているが、その際、王の武勇を称えるだけでは満足しない。例えば 1558 年のカレー攻囲について、次のように述べる。

カレー攻囲の際、パリで開かれた三部会議会で、彼は、これまでの戦争について極めて荘重に語り、彼の面持ちと、極めて穏やかで、極めて賢慮に富んだ文句に彩られた演説によって、人々の心を擱んだが、それは彼に話したすべての人々を雄弁において遙かに凌駕した<sup>36</sup>。

このように、武勇と雄弁を兼ね備えた王が、彼の理想であった。

王の生涯に続いて、パスカルはその人物を精密に描き出す。アンリ二世はあらゆる徳を備えた最良の君主とされる。信義を重んじ、慈愛に満ち、思慮に富み、文芸や音楽を愛し<sup>37</sup>、敬神の念篤く、敵にも敬意を忘れない。ラテン語は無論、イタリア語やスペイン語を流暢に操る。鷹狩りではなく狩猟を、賭博ではなくポーム遊び等の運動を好む。馬術も巧みで、武器の扱いにも長じている。これらの描写は、カスティリオーネの理想の宮廷人を髣髴させる。

<sup>35</sup> *Journal*, éd. citée, introduction, p. xxvii.

<sup>36</sup> *Henrici II, Galliarum regis, elogium*, éd. citée, p. 16.

<sup>37</sup> 「彼は、天性ゆえに、また父 [フランソワ一世] の範に促されて、すべての文芸を、そして、偉大で著名な人々の事跡を不朽のものとする事ができるような、優れた精神を重んじた」 (*Ibid.*, p. 27) とある。これはパスカル自身のことを指すのかもしれない。

次いで、顔や身体の描写に移る。王は大きく逞しいが均整の取れた肢体を持ち、鼻はまっすぐ高く、額は広く、目は灰色である。表情は厳しさと優しさを兼ね備える。肌は赤みがあった褐色で、髭は濃いながくはない。ある程度の美化は当然あるのだろうが、それと同時に、肖像画と競い合うように、文章によって王の個性を描き出そうと腐心している点が興味深い。

このように、故王を人文主義的な理想へと近づけ、古典に則った典雅な文体で表すというのが、パスカルの——そしておそらくはカトリヌ・ド・メディチの——目算であった。パスカルは十全にその職責を果たしているわけである。

#### (4) ラテン語草稿の断片と1562年の『日記』

とはいえ、『アンリ二世頌』は、厳密に言えば史書とは言えない。では、歴史家としてのパスカルの仕事ぶりは実際どのようなものであったのか？彼が残した作品は、ボヌフォンが断片を転記しているラテン語の歴史草稿と、フランス語で記された1562年の『日記』である。両者は異なった題材を扱っているため直接比較できるわけではないが、各々の文体や構成、視点等を検討することは可能である。

題材の面から言えば、例えばニコル・ジレスが企てたような、フランスの建国はたまた天地の創造にまで遡る全体史ではなく、自分が直接取材できる範囲を超えない、近過去ないしは同時代の出来事を扱っている。しかし、例えばコミーヌやデュ・ベレー兄弟などの回想記作家が意図的に「単純な」「裸の」「飾り気のない」文体を用いたのに対し、パスカルは、これを人文主義的理想に即したラテン語の歴史作品として完成させるのを最終目標とした。こうした役割分担は、キケロが『弁論家について』で言う「*narrator*」/「*exornator*」の区分に既に見られるもので<sup>38</sup>、当時のいわば常識に属することであった。回想録作者はあくまで生の素材を提供するものであり、雄弁と判断力を備えた歴史家がそこに優れた形式と文体を与えて不朽の作品とするのである。こうした考えは、回想記作者の側にも広く共有されていた<sup>39</sup>。

<sup>38</sup> *De Orat.*, II, 12, 54.

<sup>39</sup> コミーヌのアンジェロ・カト宛序文：「私はあなたに、咄嗟に思い出したことを書き送りますが、それはあなたが、とても慣れ親しんだラテン語で書こうとしている何らかの作品のために私にお頼みになったのだと考えてのことです」(Commynes, *Mémoires sur Louis XI*, éd. Jean Dufournet, Paris, Gallimard, 1979, p. 34)；マルタン・デュ・ベレーの『回想記』序文：「私はただ、私よりも博識な人たちのために道を準備することだけを望んだ。彼らは、私がおおまかに下書きしたものを彫琢して、より美しく飾られた文体と言葉でそれを書き、そこに彼らがより相応しいと知ってい

ラテン語の断片は、このような歴史を雄弁の一環と捉える立場を明瞭に示している。フランソワ・ド・ベルフォレはフランスの歴史家を列挙する中、ポール・エミールとアルヌール・ド・フェロンに続いて、「雄弁なピエール・パスカル<sup>40</sup>」を挙げるが、それに恥じない出来栄えと言える。ポヌフォンの転記した断片を見る限り、パスカルは、キケロ主義者の自負に相応しく、古典に範を取った措辞と構成に意を注いでいる。文体は簡潔で明瞭である。スペイユの指摘する通り、銃器など新しい事物を表すためにさえ、古典の語彙を援用している<sup>41</sup>。これはベンボの『ヴェネツィア史』などとも共通する。

時代が下って、1562年の『日記』では、パスカルはまったく異なる態度を示している。これはおそらく公表を前提にしない原稿であり、ラテン語草稿と同列に扱うわけにはいかないが<sup>42</sup>、フランスが骨肉相食む宗教戦争へと転がり落ちていく転換期を、まさにその中に生きる者として記すに当たって、彼の歴史家としてのあり方に質的な変化が生じているように思える。というのも、『日記』とは、クロード＝ジルベール・デュボワがピエール・ド・エトワールについて述べていることを藉りれば、時々刻々と移り行く出来事を対象とし、さらには様々な不確かな噂や証言、文書、手紙などを採録するという、優れてジャーナリスティックなジャンルなのである<sup>43</sup>。

---

ることを付け加えたり差し引いたりして、我々の時代の高德で記憶すべき出来事を後世へと保存してくれるだろう」(*Les Memoires de Mess. Martin du Bellay Seigneur de Langey*, Paris, l'Olivier de P. l'Huillier, 1569, préface non paginée). Philippe Aries, « Pourquoi écrit-on des Mémoires ? », *Les valeurs chez les mémorialistes français avant la Fronde, colloque de Strasbourg et Metz – 18-20 mai 1978*, éd. Noëmi Hepp et Jacques Hennequin, Paris, Klincksieck, 1979, pp. 15-16 参照。

<sup>40</sup> *XVIII Histoires tragiques extraites des œuvres italiennes de Bandel*, Turin, César Farine, 1570, f. 153 v° ; préface à la continuation. ベルフォレもパスカル同様、トゥールーズにゆかりがあるが、両者に交友があったのかは定かでない。

<sup>41</sup> 例えば大砲の火薬を表すのに *pulvis tormenterius*、重火器を表すのに *tormenta bellica maiora* という言葉を用いている (Soubeille, art. cité, p. 203)。

<sup>42</sup> スペイユはこれを、自明の如く、ラテン語の歴史の準備稿と見做している (Soubeille, art. cité, p. 203)。ただ、これ以外のフランス語の準備稿も、この『日記』に基づいたラテン語での歴史の草稿も発見されてはいない。少なくとも、ラテン語に熟達し、文学活動のすべてをラテン語で行っていたパスカルが、草稿とはいえフランス語を敢えて用いているというのは、奇妙に思える。これ以上は推測になるが、この『日記』は、王侯ないしは高官の後日の用に供するために書かれたのかもしれない。

<sup>43</sup> Claude-Gilbert Dubois, *La Conception de l'histoire en France au XVI<sup>e</sup> siècle (1560-1610)*, Paris, A. G. Nizet, 1977 ; Genève, Slatkine Reprints, 2011, p. 195, pp. 198-199. ピエール・ド・エトワールの場合は、そこにさらにモンテーニュに倣った自己への関心が見て取れるが、パスカルについてはそこまで言うことはできないだろう。

ここでのパスカルは、雄弁に属する文芸作品としての歴史を求めず、簡潔なフランス語を用い、また証言の蒐集と事実の確認を何よりも重んじている。そのため彼は、テキストの中に「私」として絶えず現れる。例えば、一月勅令による新旧両教の和解の試みが、ギーズ公の手による新教徒虐殺とそれに対抗する新教徒側の叛乱・蜂起によって烏有に帰した直後にあたる、五月九日の項を引いてみよう。

五月九日土曜日、オルレアンより□□□ [原文空白] の神父到着。彼の返答は前回に略同じ。しかし彼自身が私に言うことには、かつてないほど平和の希望があるとの由。彼は日曜早朝、オルレアンに戻る。同日、パリにて平和のため、万人が行列する。サンスの近くでバルブジエ殿に打ち負かされた幾ばくかのユグノーに関する風説が至る。(このユグノーたちは、オルレアンへと向かい、風聞によると、武装した三百人ばかりの集団である。) ユグノーによってドファイネのグルノーブルが陥落したとの風説<sup>44</sup>。

このように、パスカルは自分の見聞や世上の風説を含めて様々な証言を渉猟するだけでなく、不確定な固有名詞を後日の調査に備えて空欄にしておくなど、克明な取材を行っている。王侯や大官との会話、勅令や公私の書簡などもそのまま収められている。しかしそれは同時に、客観的な出来事の描写・分析ではなく、彼自身の経験の記録である。ドルーの戦いに関する顛末などは、パリに刻々と伝わってくる風聞をその混乱のままに記述している<sup>45</sup>。

このように、『日記』におけるパスカルは、進行中の歴史のただ中で、自ら同時代の出来事の証人となることを旨としている。無論、これらの断片的な草稿から彼の歴史家としてのあり方の変化を結論付けるのは、拙速の譏りを免れないだろう。我々はこれを、パスカルの周辺にいた、主にプレイヤード派の詩人たちの視点から、改めて辿ってみることにしたい。

## 2. プレイヤード派とその周辺から見たピエール・パスカル

歴史家としてのパスカルは確かに断片的で僅かな作品しか残していないが、同時代の人々は、彼に歴史家としての活躍を期待して、あるいはそのあり方を批判して、様々な評価を下している。中でもパスカルに近しかったプレイ

<sup>44</sup> 欠文はサン＝ジャン・ド・ラオンという (*Journal*, éd. citée, p.34)。

<sup>45</sup> *Journal*, éd. citée, p. 116 sq.

ヤード派とその周辺の人々が彼に寄せた賛美と罵倒の数々は、歴史をめぐる彼らの考えを示唆している点、興味深い。

### (1) 友誼

イタリアを離れ、パリに至ったパスカルは、おそらくココレ学寮のジャン・ドラを通じて、プレイヤード派の詩人たちと交わることになった。多くの詩人がパスカルに詩を寄せている上<sup>46</sup>、彼は1553年謝肉祭のジョデルの『クレオパトラ』初演や1554年のアンリ・エチエンヌによるアナクレオン作品集刊行を祝う集いといった、グループの決定的な場にも立ち合っている。彼はまた、一団の領袖であるロンサールをトゥールーズの「花の祭り」に推薦し、ロンサールはパリにいながら野薔薇の花冠と銀のミネルヴァ像を授かるという異例の榮譽に浴することとなった<sup>47</sup>。

デュ・ベレーは、アンリ二世に宛てた詩で、パスカルとロンサールを、それぞれ散文と韻文でフランスの文芸を刷新する人物として、並び称している。詩と歴史の区別を説いている点、興味深いので引いてみると、

陛下よ、このように歴史の力を語りながら、  
私は詩についても語っているのです。というのも、よく知られたことですが、  
これら二つはともに同じような欲求、  
すなわち有益さと快楽を与えたいという欲求に衝き動かされているのです。  
これら二つは、その作品によって同じことを目指していますが、  
同じ目的に違った方法で迫りつこうとしているのです。

歴史のほうは、何の虚構も用いず  
それぞれの出来事の真実を表します。  
あたかも、それ以上に潤色することを敢えてしない人が、  
自然な表情を見たままに写し出すように。  
詩のほうは、より大胆で、制約のない技術によって  
無数の虚構の下に真実を隠します。  
あたかも、ある画家が、大胆にも  
軍勢や陥落した都市のありさま、  
嵐や戦争や、さらには神々までも、  
人間のようにして我々の眼前に立ち現すのです。  
この前者に当たるのが、陛下、あなたのジャネ [=ジャン・クルエ] であり、

<sup>46</sup> 以下で引くロンサールとマニイを除くと、例えば Joachim Du Bellay, *Les Regrets*, 2, 66, 81, 102, 129, 188 ; *Sonnets Divers*, 36 ; Jacques Tahureau, *Les Premières Poésies*, XXIV.

<sup>47</sup> ロンサールはこの像をアンリ二世に献上している。

後者に当たるのがミケランジェロといえるでしょう。  
前者にはあなたのパスカルがその技術において並び、  
後者にはあなたの博学なロンサールが似通っています<sup>48</sup>。

イタリアの先進的な文化の後光を備えたパスカルが、ポール・ジョヴに倣った名士伝を約束したとき、彼らが欣喜雀躍したことは想像に難くない。ロンサールもまた、「アルピヌムの宝を収穫した<sup>49</sup>」パスカルの雄弁に大いに期するところがあった。彼は、1554年の詩集『緑陰集 *Bocage*』をパスカルに捧げているが、その狙いを次のように語っている。

そして私が望むのは、お返しに、  
パスカルがやがて私を  
彼の雄弁によって不滅のものとしてくれることである。  
その雄弁は、王たちの財産にも勝るものなのだ<sup>50</sup>。

ロンサールは同集の中のエレジーの一つでも、ミューズの女神たちが彼とパスカルを固い絆で結びつけており、二人は一心同体だと高らかに謳っている<sup>51</sup>。

1555年版の『オード集』でも、ロンサールはパスカルにオードを捧げて、次のように言う。

何ということか？ 君が私を永遠のものとしてくれるのだ。  
そして、もし私がいくらかの名声を持つとしたら、  
パスカルよ、それは私を持ち上げてくれる  
君の声によってでしかないのだ。

というのも、時は、他のものに対するのと同じように  
忘却を齎すわけではないのだ。  
かくもローマ的な君の言葉によって

---

<sup>48</sup> « Discours au roy sur la Poésie », vv. 77-96, *Œuvres poétiques*, éd. Henri Chamard, Paris, Droz, 1931, t. VI-1, pp. 164-165.

<sup>49</sup> « A P. Paschal, gentilhomme du pays de Languedoc, historiographe du roy » (texte de 1552), *Œ. C.*, t. I, p. 513. アルピヌムはキケロの生地。ミュレの註解も、パスカルが「現在の人々の中で、もっともキケロに習熟した人の一人」であると言う (*Les Amours commentés par Marc-Antoine de Muret*, éd. Hugues Vaganay, Genève, Slatkine Reprints, 1970, p. 392)。

<sup>50</sup> « Ode », vv. 29-32, *Le Bocage* (1554), *Œ. C.*, t. I, p. 1201.

<sup>51</sup> *Les Élégies*, XVI, vv. 2-3, *Œ. C.*, t. II, p. 370 (voir aussi p. 1410). 仲違いの後、パスカルの名はレミ・ベローに置き換えられている。

磨かれた著作に対しては<sup>52</sup>。

パスカルのキケロ風の雄弁に託されたのは、個々の詩人の榮譽だけに留まらない。彼の筆には、栄えあるフランスの歴史全体が懸かっていたのである。ロンサールは、1558年末に書かれたとされる「ロレーヌ枢機卿への賛歌」で、パスカルをデュ・ベレー、ドラと並べ、「我々に我々のローマ風の歴史を与え／〔枢機卿〕がフランス人の榮譽を託した<sup>53</sup>」人物として称揚している。また、「アンリ二世の軍営への督励」の1559年版テキストでは、次のように兵士達に呼びかける。

貴殿らの麗しい名声は  
パスカルの作品によって永久に読まれることとなる。  
この男にかの高貴な王は全王国の榮譽を託し  
彼に相応しい勇敢な兵士を称え、  
何にも相応しくない臆病者を非難させたのである<sup>54</sup>。

カオール出身の詩人オリヴィエ・マニイは、プレイヤード派周辺の詩人たちの中でも特にパスカルと親しかった。彼はパスカルに詩集『惑乱集 *Gayetez*』（1554）を献じ、また、1559年の『オード集 *Odes*』では博識と雄弁を兼ね備えた「我らのキケロ *nostre Ciceron Paschal*<sup>55</sup>」という役回りを与えている。その雄弁が彼に永遠の榮譽を授けてくれるのである。

「キケロ」パスカルが、私の灰の上に  
私の美德を証立てて、彼の手によって

<sup>52</sup> *Odes*, I, xxi, « À Pierre Paschal », vv. 33-40, *Œ. C.*, t. I, p. 676. なお、1550-1553年の版では、「確かに私の明らかな詩句が／君が私の友であったと告げるだろう／そして君を／天上の人々の榮譽にまで高めながら。／／時の流れは／作りこまれた宮殿をも毀つが／私の詩神の弓から放たれた／勝利の矢を毀つことはない」（*ibid.*, p. 1515）という風に、ロンサールとパスカルの役割が逆であった。

<sup>53</sup> « L'Hynne de Charles Cardinal de Lorraine », vv. 598-599, *Œ. C.*, t. II, p. 507.

<sup>54</sup> « Exhortation au camp du Roy Henry II », vv. 116-120, *Œ. C.*, t. II, p. 807 et la note, p. 807. 「パスカルの作品によって Par l'œuvre d'un Paschal 」の一節はもともと「私の詩句の中に読まれる Et releu dans mes vers」であった。ドラはこの詩をラテン語に訳しており（« *Exhortatio ad milites Gallicos* ）、パスカルへの言及もそのまま残されている。ノラックは独立したものとしてドラの章句を引くが、あまり適切ではない（*Nolhac, op. cit.*, p. 321）。実際のところ、ドラはパスカルにさしたる関心を寄せなかったようである（Geneviève Demerson, *Dorat en son temps : culture classique et présence au monde*, Clermont-Ferrand, Adosa, 1983, pp. 45-49）。

<sup>55</sup> *Odes* (1559), II, iii, « À Nicolas Compain, conseiller au grand conseil, en faveur de Pierre de Paschal », v. 141, éd. François Rouget, TLF, Genève, Droz, 1995, p. 162.



彼のローマ的弁論の最も神々しい宝を広げてくれる<sup>56</sup>

ロンサールの場合と同様、マニイはパスカルの雄弁に、個人の名声だけでなく、フランスとその王の栄光を不朽のものとするを託している。パスカル本人に宛てたオードには、次のようにある。

ローマ的な仕事に携わりながら、  
あなたは、その博学な手によって  
フランスの歴史の糸を織りなすだろう。  
かくも巧みに我々の偉大な王の  
勝利と栄誉とに羽を与えたので、  
永遠にその栄光が、あなたによって  
記憶の中を速く飛び回るだろう。

これからやってくる我々の子孫は必ずや  
我々の美しく豊かなフランスを  
大いに幸せであると思うことだろう。  
そこから「無知」が一扫され、  
今や、彼女がその懷に  
キケロと甘美な雄弁において並ぶ  
パスカルを抱いていることに<sup>57</sup>。

マニイの最後の詩集となった『オード集』が編まれたのは1559年のことであつたが、この年はまた、アンリ二世が急死し、パスカルが『アンリ二世頌』を著した年でもあつた。ここで突如として風向きが変わる。ロンサールとチュルネーブが一斉に、パスカルに対して激越な諷刺を浴びせかけたのである。両者の豹変の動機については諸説あつて判然としないので姑く措く<sup>58</sup>。ただ、これらの攻撃は一方的で悪意に満ちたものではあるが、彼らがパスカルのいかなる点を歴史家として不適格であると非難しているかを見れば、彼らがどのような歴史家を——暗々裡にせよ——理想としていたかを浮き彫りにすることができる。とりわけ、キケロ風文体に対する彼らの評価の急変を、そこでは見ることができるだろう。

---

<sup>56</sup> *Odes*, I, xiii, « L'Ombre de Salel, à Monsieur d'Avanson », vv. 114-116, éd. citée, pp. 106-107.

<sup>57</sup> *Odes*, II, iv, « Sur son partement de France pour aller en Italye, à Pierre de Paschal Historiographe du Roy », vv. 43-56, éd. citée, p. 168.

<sup>58</sup> 註16参照。

## (2) 反目

まずはチュルネーブの諷刺詩「文学研究から利益を得るための新しい方法についての書簡」を見てみよう。これは、上に述べたように、デュ・ベレーが直ちにフランス語に訳している<sup>59</sup>。この詩は、パスカルの名を敢えて挙げず、宮廷に跋扈する阿諛便佞の徒を一挙に叩くことを目指している。それゆえ論旨は必ずしも一貫していない。

まず前面に出るのは、反イタリア主義である<sup>60</sup>。軽佻浮薄なイタリア人やイタリア人もどきが宮廷に跋扈し、阿諛追従を事とし、虚偽と虚飾に染まって恥じることない、といったイメージである。そこでは、文化的な先進国であったイタリアに対する嫌悪と羨望、劣等感と反発心が混淆している。イタリア仕込のキケロ風文体を誇るパスカルなどは、恰好の槍玉であった。

お前は、ここを発つときには立派にフランス人でありながら、  
イタリア人になって帰ってくるだろう。  
振る舞いも、服装も、顔つきも、言葉も。  
要するに、お前はイタリア人の毛並みになり、  
お前の仲間たちのうちで賞賛を博すだろう<sup>61</sup>。

こうした連中が挙句の果てに「文芸の榮譽を自分一人に帰し／フランスのミネルヴァに唾を吐きかけ、蔑ろにする<sup>62</sup>」と言って、チュルネーブは憤激する。パスカル自身は、雄弁というイタリアと同じ土俵でイタリアに対抗し、凌駕することで、祖国フランスを盛り立てようとしていたのだったが、チュルネーブにかかると、彼自身がイタリアかぶれとして断罪される羽目になる。

---

<sup>59</sup> 以下、デュ・ベレーの翻訳から引用する（« La nouvelle manière de faire son profit des Lettres », *La Monomachie de David et Goliath*, XIII, éd. citée）。チュルネーブの原文は John Lewis, *Adrien Turnèbe (1512-1565) : a humanist observed*, THR n° CCCXX, Genève, Droz, 1998, pp. 270-289 に引用、解説されている。但し、これはパスカルに対する評価のほとんどをノラックに負っているため、その点は割り引いて考える必要がある。

<sup>60</sup> 反イタリア主義については Lionello Sozzi, « La polémique anti-italienne en France au XVI<sup>e</sup> siècle », *Atti della Accademia delle Scienze di Torino*, t. CVI, 1971-1972, pp. 99-190 ; Jean Balsamo, *Les Rencontres des Muses : Italianisme et anti-italianisme dans les lettres françaises de la fin du XVI<sup>e</sup> siècle*, Genève, 1992。これにはまた、反宮廷人という側面もある。これについては Pauline Smith, *The anti-courtier trend in sixteenth century French literature*, THR n° LXXXIV, Genève, Droz, 1966 参照。

<sup>61</sup> Du Bellay, vv. 65-69 ; Turnèbe, vv. 46-49.

<sup>62</sup> Du Bellay, vv. 47-48 ; Turnèbe, vv. 31-32.

そして、これは明らかにパスカルを指して、名士伝を著す約束を反故にしたという非難が蒸し返される<sup>63</sup>。さらにはフランスの歴史を書くと言いながら、これもまったく書こうとせず、ただそのために与えられた榮譽と報酬を掠め取っている。チュルネーブは、歴史家が雄弁によって人物や国家の栄光を不朽のものにするという従来 of の考え自体は踏襲している。彼が断罪するのは、パスカルがそれを単なる成り上りの方便にしたという点なのである。

この詐欺師はこうした手立てでおおいに豊かになった。

そして、自分の沈黙を王侯に高く売りつけた。

彼の著作なしでも、永遠の記憶に栄光を刻み得たであろう美しい名前を忘却の海に溺れさせながら<sup>64</sup>。

ロンサールの「ピエール・パスカル賛」は、より照準が明確である。パスカルに対する執拗な人格攻撃はともあれ<sup>65</sup>、彼の歴史家としてのあり方を俎上に挙げている箇所は興味深い。チュルネーブが社会的・文化的な見地からパスカルを弾劾したのに対し、ロンサールの攻撃はより、パスカル個人の仕事ぶりに即し、また文学的な問題と結びついている。

ロンサールの解釈によると、パスカルは、文芸の士の間では無知が露見するのを恐れて寡黙を装っていたが、王の歓心を得てフランス史の執筆に携わるといふ段になると、すっかり人が変わった。

今や彼はかつてのような啞中の啞には見えなかった。口を歪め、目を天に向け、公然と自らが世界で最も雄弁で、真のキケロ主義者だと自慢して恥じることがなかった。しかし、自分自身の武器には何も頼れなかったので、補助となる武器の助けを借りた。すなわちトポス集であり、ドラの『註解』であり、マヌスの膨大な書物であり、ロベール・エチエンヌやニゾリの浩瀚な『宝典』である。それらの中では、キケロのすべての章句を容易に見つけることができるのだ。

<sup>63</sup> 「あるものは、当代の著名人たちの名を読むことのできる／作品を書こうとしていたと称しているが／既に十二年だか十五年だか、この手で我々を欺いている。／しかし彼がこの約束を果たすのは／最後の審判の日よりも後のことだろう」(Du Bellay, vv. 157-161 ; Turnèbe, vv. 120-124)。

<sup>64</sup> Du Bellay, vv. 167-170 ; Turnèbe, vv. 127-130.

<sup>65</sup> この作品は、「バスク人ピエール・パスカルは、本人は法皇ウルバヌス三世の血筋を引くと誇っているが、その名の示す通り、卑陋な家の生まれである」(CE. C., t. II, p. 1212) で始まる、誹謗文書に近いものである。しまいには、パスカルの顔つきや立ち居振る舞いまでもが嘲笑に晒される (*Ibid.*, p. 1222)。

彼は厚かましくも自分の歴史を、他のものではなくキケロ自身の言葉で、継ぎ合わせようとした<sup>66</sup>。

キケロ主義をめぐる論争を背景に、キケロ風文体というものの自体が、もはや手放して称えられるべきものではなくなっている。ロンサールは、キケロ一人に固執するのではなく、あらゆる古典作家から多彩な語彙や表現を学ぶべきだとする。「最も広く最も豊かな雄弁は、キケロがいかにか雄弁であったとしても、彼一人の中にあるのではないし、文学の豊穡さはそこに留まらない<sup>67</sup>」という訳である。もともとの批判の動機はどうであれ、彼の中に、徐々に陳套に墮していったキケロ主義からの転回があったことが見て取れる。

ロンサールはまた、パスカルが、王侯や大官を口八丁手八丁で瞞着し、碌な力量もないのに「国王修史官」の地位を獲得したと非難する。（「おお時代よ！ おお風俗よ！ 大法官が彼を庇護し、博識なるロレーヌ枢機卿が彼と面晤し、国王が彼を容認する<sup>68</sup>」云々）。パスカルは単なる山師であり、彼が自負する雄弁においてさえ無知の極みであるにもかかわらず、である。

ロンサールはさらに、パスカルが王の興味を引くために著したという同時代史全三巻の断片についても、フランソワ・ド・ラバタンからの剽窃である、と断罪する<sup>69</sup>。もっともこれは、ノラックすらも認めるとおり、またラバタン自身が述べている通り<sup>70</sup>、むしろ回想録と史書とのジャンルの違いによるものである。この区分については既に上で述べた。

最後に、お決まりのように、名士伝の約束が果たさなかったことへの恨み節が現れる。フランス史の計画が頓挫した後、パスカルが苦し紛れに言い出した方便ということになっている<sup>71</sup>。ロンサールは、パスカルが無知蒙昧で、その任に堪えないと貶める。

パスカルに対する批判には二つの面がある。文体上の問題としては、パスカルが誇るキケロ風の雄弁自体への批判と、彼の能力がそこで要求される水準に達していないという批判とが並存する。社会的・文化的な問題としては、彼が文章を以て栄達を図るために妄言を以て世人を欺いたという批判がある。とはいえ、チュルネーブにしてもロンサールにしても王権の求心力の圏内で

<sup>66</sup> « Éloge de Pierre Paschal », *Œ. C.*, t. II, pp. 1215-1216.

<sup>67</sup> *Ibid.*, p. 1216.

<sup>68</sup> *Ibid.*, p. 1217.

<sup>69</sup> *Ibid.*, pp. 1218-1219.

<sup>70</sup> Nolhac, *op. cit.*, pp. 311-312; François de Rabutin, *Commentaires des dernières guerres en la Gaule belgique*, CMHF, t. XXXI, 1823, p. 15.

<sup>71</sup> « Éloge de Pierre Paschal », *Œ. C.*, pp. 1220-1221.

文学的・学問的な栄達を狙っていた訳であり、この点に関しては修史官として高給を得、また『アンリ二世頌』の執筆を任せられたパスカルへの嫉妬心が垣間見えないわけではない。

### (3) 和解

とはいえ、パスカルに対する集中砲火はさほど長くは続かなかった。デュ・ベレーとの和解は早かった。デュ・ベレーの生前最後の詩集『クセニア *Xenia*』にはパスカル宛のラテン語詩が収められており<sup>72</sup>、パスカルも、1560年のデュ・ベレーの死に際し、この「真の旧友」に哀悼を示している<sup>73</sup>。1562年頃までには、少なくともロンサールとも和解が成立した。危機に直面した王権の支えとして文芸の士を糾合しようとしたカトリヌ・ド・メディチやミシェル・ド・オピタルの下、ロンサールは韻文、パスカルは散文という棲み分けが行われることになる。チュルネーブとの不和の顛末は定かではないが、少なくとも攻撃が継続することはなかった。間もなくパスカルはパリを去ってトゥールーズに戻り、1565年、その地で歿する。チュルネーブも日を置かず亡くなった。

ロンサールの場合、パスカルとの和解は、同時代の悲慘を目の当たりにした人文主義的理想の変質と軌を一にしているように思われる。これはちょうど、パスカルが『日記』をしたためていた時期と符合する。ロンサールが歴史家に求めるあり方もまた、変容した。すなわち、1562-1563年頃に書かれたとされる『当代の悲慘を論ず *Discours des misères de ce temps*』には、新教徒の攻勢に対してフランスの国体と正当な信仰を擁護する悲壮な決意をパスカルに呼びかける一節があるだけでなく<sup>74</sup>、歴史家について言及した次のような箇所がある。

<sup>72</sup> *Œuvres poétiques*, t. VII, éd. G. Delerson, Paris, A. G. Nizet, 1985, p. 89.

<sup>73</sup> Bonnefon, *op. cit.*, pp. 53-54.

<sup>74</sup> 「おおパスカルよ、君はかくもすばらしい作品を書き上げたが、／それを明らかにしてはくれないか？／人々がそれを、王と教会すべての榮譽のために、／眺め、学び、読むことができるように。／ああ！君は言うだろう「我々の著作が印刷されたのを見た途端、／彼らは我々を殺すだろう。／というのも、彼らの心は巣箱を燻された蜂以上に／怒りに掻き立てられているのだ」と。／死ぬことならば、パスカルよ、私は覚悟ができています。／神がそう望むならば、彼らの手で死ぬだろう。／だからと言って私は、真実を書き、／愛し、それを説き語ることを抑えようとは思わない」（« Remontrance au peuple de France », vv. 533-544, *Œuvres complètes*, éd. Paul Laumonier, t. XI, Paris, Marcel Didier, 1946, pp. 90-91）。ロンサールがパスカルのどの著作を念頭においているのかは判然としない。ローモニエも未完成のラテン語の歴史か1562年の『日記』のいずれかが決めかねている。なお、この一節は1584年版のテキスト（及びそれに準拠するプレイヤード版）では削除されている。

おお汝、歴史家よ、そなたは偽りのないインクによって  
我々の時代のおぞましい歴史を書き記す。  
我々の子孫にこの忌まわしい不幸のすべてを語る。  
彼らがそなたの本を読みつつ我々の不幸に涙するために、  
そして彼らが、同じような悲惨さに陥ることを恐れて  
彼らの祖先の罪を教訓とするために。

いかなる顔、いかなる目をもって、おお移ろいやすい時代よ、  
彼らは当代の歴史を眺めることができるだろうか！

かくも長い間伸張してきた  
フランスの栄誉と王位とが、  
戦争を生み出す「臆見」によって  
あたかも巨岩のように、上から下へと覆されるのを読んで<sup>75</sup>。

ノラックは、国王修史官の職をパスカルから襲ったフランソワ・オトマン  
に宛てたものとするが<sup>76</sup>、年代から言っても、またオトマンが熱烈な新教徒  
であった事実から言っても、疑わしい。ローモニエ版及びブレイヤード版の  
註の如く、パスカルを指したものとするのが適当だろう。現実の悲惨を目に  
した文学者の責務は、雄弁によって国家の過去の栄光を顕揚するのではなく、  
悲惨な時代を凝視する眼となり、その筆をもって後世に「教訓 *exemple*」を  
授けることである。雄弁への配慮は、真実を潤色も取捨選択もなしに表す  
という目的に道を譲ることになる。

歴史が真実を語るべきだ、とする主張には、歴史家が時代の真正な証人と  
なるべきだ、ということの他に、もう一つの含意がある。すなわち、叙事詩  
はなお国家の栄光を語りうるかもしれないが、真実を旨とする歴史はもはや  
その任ではないということである。これは後に『フランシアード』序文で彼  
が明言することであるが<sup>77</sup>、このような区分を受け入れる限り、歴史家たる  
パスカルはもはや彼の競争相手たりえないのである。

<sup>75</sup> « Discours à la Roynie », vv. 115-126, *Œ. C.*, t. II, p. 994. 「臆見 *Opinion*」は具体的には  
新教の異端を指す。

<sup>76</sup> Nolhac, *op. cit.*, 337.

<sup>77</sup> 1572年の『フランシアード』序文でロンサールは、アリストテレスの『詩学』を援  
用しながら、次のように言う。「確かに歴史は詩と多くの点で類似しており、[...]  
そこでは詩人は弁論家と同じく真実を枉げてはならないのであるが、とは言え、両  
者は主題においては、ちょうど真実らしさが真実とかけ離れているだけ、互いに隔  
たっている。歴史はただ、起きた事、あるいは起こった事をありのままに何の粉飾  
もなしに受け入れるのであるが、詩は真実らしさ、起こりうることないしは一般的  
な見解において既に受け入れられていることを語るのである。」そしてこのように  
注意を促すのは、「我々の中の最良の人たちさえもが、『フランシアード』がフラン  
スの諸王の歴史であって、私が詩人ではなく歴史家になろうとしているように考

1568年、グイッチャルディーニ『イタリア史』の翻訳者ジェローム・ショムデに宛てたソネで、ロンサールは理想の歴史家を描いている。

否、言葉ではなく、ショムデよ、事物こそが  
歴史を後世において生きたものたらしめるのだ。  
美文ではなく、真実こそが  
歴史を隠している唯一の宝蔵なのだ。

雄弁であると同時に虚栄から遠ざかる、  
この二点を等しく目的とする者は  
年月に打ち勝ち、  
パラスの棲家にその本を収めるに値するだろう。

多くの野心的な人間は何よりもまず  
王侯に諂うことを歴史よりも先にし  
空しい驚嘆事について気儘に論じる。

それを聞いたことも、見たこともなく、確たる証拠もなしに。  
だが君の真のグイッチャルディーニはより信頼に値する  
なぜなら目で見た証言は耳で聞いたものより確実だから<sup>78</sup>。

ノラックのように、これをパスカルに向けた当てこすりとする必要はないだろう<sup>79</sup>。ロンサールはかねてから歴史に、個人や国家の栄光の顕揚と、同時代の出来事の証言という、二つのことを求めていた。これは実際には歴史と回想録というジャンルの差異に起因するのであるが、彼において、両者の区別はさして明瞭ではなかったのである<sup>80</sup>。このソネの中では、歴史における雄弁は、否定こそされないが、大いに重要性を減殺されている。雄弁を追求する者は、しばしば虚栄や阿諛に陥り、真実から遠ざかる危険があるから

---

えているからだ」と言う (*Œ. C.*, t. I, pp. 1181-1182)。

<sup>78</sup> « [Sonnet à Jérôme Chomedey] », *Œ. C.*, t. II, pp. 1127-1128.

<sup>79</sup> Nolhac, *op. cit.*, p. 309.

<sup>80</sup> パスカルの雄弁に彼自身とフランスの栄光を託していたのと同時期、1554年に書かれた「歴史家フィリップ・ド・コミーヌの墓碑銘 *Épitaphe de Philippe de Commines, historien*」では、コミーヌを指して「出来事の真実に雄弁 (*beau parler*) を匹敵させることができる」点でティトウス・リヴィウスをも凌駕するという (vv. 7-8, *Œ. C.*, t. II, p. 938)。それと同時に、「彼は出来事に立会い、自分の見たことでなければ／何も描こうとしなかった。公爵のためにも王のためにも／彼は歴史の信憑性 (*la foy de l'Histoire*) を裏切ろうとはしなかった」 (vv. 22-24, *Œ. C.*, t. II, p. 939) という点を評価している。

である。ここでのロンサルは歴史家に対し、グイッチャルディーニが、そして『当代の悲慘を論ず』で描かれた歴史家がそうであるように、時代の有為転変に立ち会う当事者として透徹に確かな証言を後世へと伝えることを、何よりも求めるのである。

## 結論

既に若き日、ヴェネツィア共和国に向けて、擬人化したフランスの嘆きを書いていたパスカルにとって<sup>81</sup>、自身の文学的栄光の獲得と祖国の栄誉の伸張は表裏一体であった。彼にとって、その方途はキケロ主義の規範に則った雄弁においてイタリアを凌駕することであった。そして、『フランス史』の実現はその頂点となるはずだった。

ロンサルをはじめ、プレイヤー派の詩人たちも、彼の帰朝を熱烈に歓迎した。パスカルのキケロ風散文は、彼らの憧れであり、誇りであった。彼らはまた、フランスの歴史に留まらず、パスカルの約束した名士伝によって、彼らの名が典雅なラテン語によって永遠に刻まれることを願ったのである。

期待が大きかっただけに、失望も大きかったのだろう。パスカルが国王修史官になり、『アンリ二世頌』を任されて栄達を遂げていく一方で、名士伝の約束が果たされないとなると、チュルネーブとロンサルは一転してパスカルに激しい攻撃を浴びせた。彼らの悪意ある解釈にかかると、パスカルは、キケロ主義を標榜して才能の不足を誤魔化し、王侯や高官に取り入って利得を貪ることに血道を上げる、イタリア帰りの売文屋・詐欺師に過ぎないということになる。ロンサルなどは、キケロ風文体それ自体にも疑問を浴びせるに至った。実際のところ、パスカルはその間にも孜孜としてラテン語の歴史の執筆を続けていたようであるが、結局これを公刊ことはできなかった。

1562年、カトリヌ・ド・メディチの宥和政策が失敗し、血で血を洗う宗教戦争が勃発すると、このような争いはもはや意味をなさなくなる。国家は分裂の危機に瀕し、文芸の権威は失墜した。歴史家に課せられた役目は、雄弁をもって国家の栄光を称えることよりも、むしろ現実の悲惨な有様を、そのただ中に生きる者として、虚飾を交えずに書き残すことへと転じた。ロンサルは『当代の悲慘を論ず』の中でそのことを訴え、パスカルはフランス語の『日記』を書いた。その4月8日の項で、パスカルはナヴァール王アント

---

<sup>81</sup> « Gallia ad Venetam Remp. per prosopopoeiam inducta », Petri Paschalii Adversus Joannis Maulii parricidas actio, éd. citée, pp. 49-59.



ワース・ド・ブルボン——彼は同年 11 月、ルーアン攻囲で斃れることになる——との邂逅について、次のように述べている。

同じ時、ナヴァール王が私を認め、呼び止めて言った。「我々は、あなたが歴史にするための材料をこんなにも沢山提供しているのだなあ！」私は彼に答えた。「私はそれを存じ上げております。ですが、私は神に祈っております。神があなたに恩寵を賜って、これらの始まりは悲惨であったとしても、結末は国家にとって救いになるようなものでありますように。そして、神はその手に、あなたも含めて王たちの心を握っているのですから、私は神があなたに何らかの良き出口となる道を指し示してくださるよう、願ってやみません<sup>82</sup>。」

ここにキケロ主義者として鳴らしたパスカルの転身が見て取れる。歴史家、より広く言えば人文主義者の責務は、文芸の伝統に根ざしたものであると同時に、現実の政治・社会の要請に呼応すべきものであった。現実の悲惨を前にして、雄弁に適った歴史はもはや喫緊の課題ではありえない。パスカルは、神に祈りつつ、自分を取り巻く現実の渾沌を肅然と書き記すのである。そしてそれは、『当代の悲惨を論ず』における、ロンサールの歴史家への呼びかけとも呼応するものであった。

---

<sup>82</sup> *Journal*, éd. citée, p. 21.